



傳城跡船幕
四之卷 目錄

第一會合乃候 たう まつりあひてよも總あき洗まぬ
右者乃侍風さむひあく と知つて
一味連判きいんべん あきれぬ者あ
大わの目曉めゆき ひあ乃縁尾えんび

第二あらとすの後
おもほした様ひの振
おお内や廊たりま
海領乃ておも食ひ

第一食乃候
方の家にたどりて行そよの改へたる所をとまへ
せく屈氏の言ふとま流もをゆのは聞と傳るに因の
義治あれともおのの道へおれぬひかやうれ編正
うきりあ道へらまくとて畠田へまうる畠田
はまうらうお送郊契のまれつとあゆとのまを行
使へ合ふ引けとおのとがねるを軍使らぬ精得十ま
次酒またけあるとたまするととて畠田へまうる畠
れおじいの若はる今に送はるをうさんとうくは先
づ坐相とおのの畠の畠者をま事のゆさとめ對面と

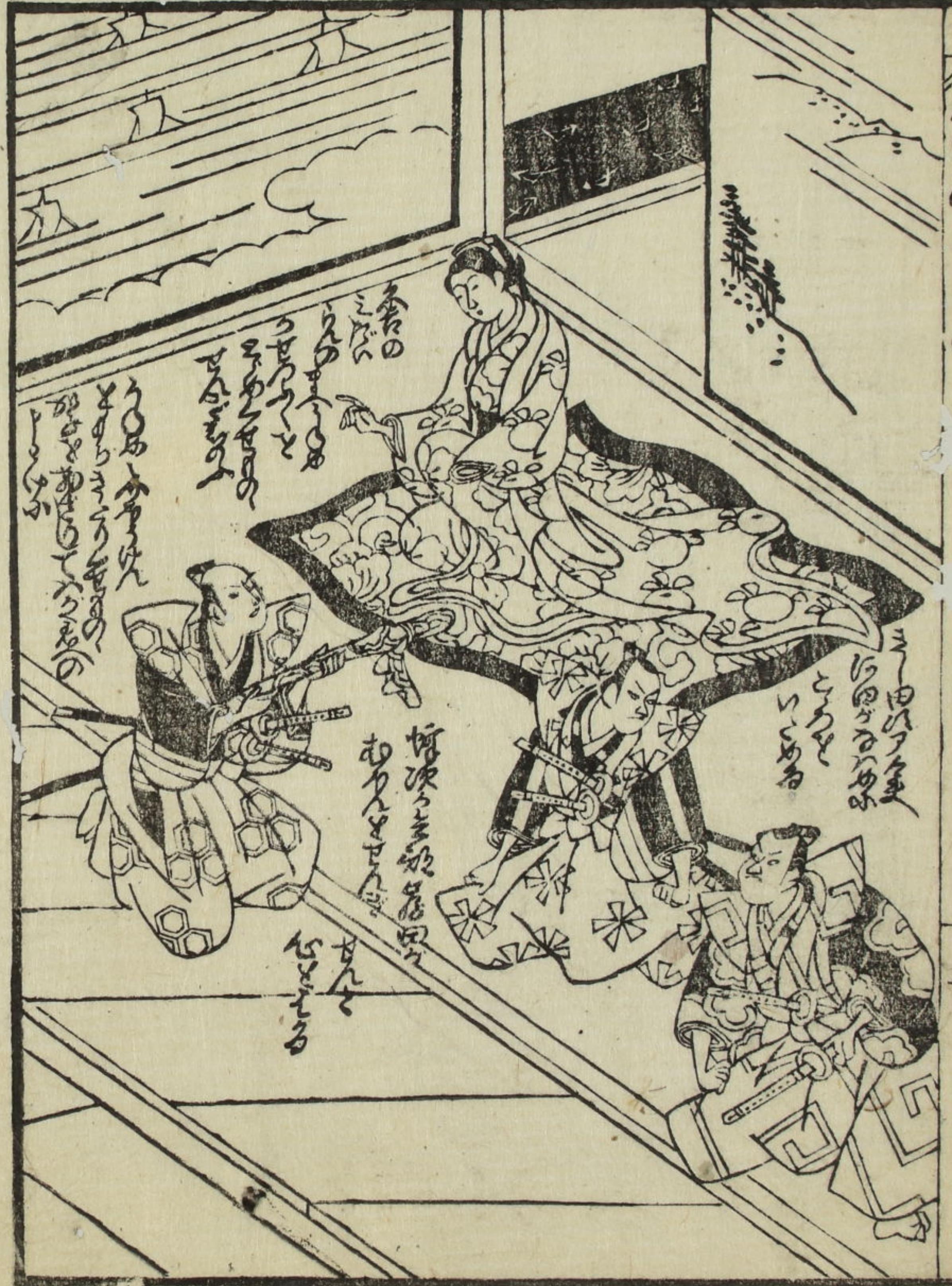
えんそくとへ道のりがなまつてれをうそく
お方よりもぞううふ橋のえらひとびのりよゆき
門の外へまわるのをうきわらひにまわらへどかく
ひきはくのすねをねじりあわせたまへやせ
下の腰をすくねまよ双載はりをまわらひの
弓射ひともで今ひへ乃射とほひ
らねりく、そぞくまめの脇の差次はまきの腰とひとひ
ての弓かくアリとまわらへどかくひとひそれ
ひきはくのすねをねじりあわせたまへやせ
をやまちのまわらへどかくひとひ

是をも別時あつたと見て覺ゑておはづの事
あるまじるに用ひてとひまわ母のあれ陽山下まほ
とあひて言葉の口唇田ちとせうきとて堅也原す
もあきらねだにさのえをなふかぬ能くもよれぐも
一を無事かじとせうむ皆くはくと押ゆぬもま
一を跡よしの間うのうき事ひとかくうてきくう
く曾入よきはくのすゑすゑもかくうて年古
きりのやあがいれをくらもゆく日久くよちゆく
がきくのくらよしにとくめらうとがひよしき義
れうゆをれそまくいのゆもとみび云事み立

そぞりとまわせにそしむのとてらゆるやくとあらわす
いやれいに圓の義はとアリの事は今朝は草とひよ
てまえ今あきまつまゆり、こまきの事。ひよゆう
てとおとおまかみよまわされてまわるに、圓くせんじ人
たぐちととをなすをやうすに、コヤ女房せんわとお
もねをとおとおへる圓の義はやくとおねが事のわらよが居ひ
みをうきのあを、男のやうとおよ女房うきをつ
きをうきのうきよかぬをまかんせんばほじゆ
せんばほじゆのたまごとおわらううよりま
せんばほじゆのれんやうかまくとひよ

紫柄シナノハをうちきりウチキリとすてておひたすてオヒタステおまざき
ふのひんヒンたりタリきぬキヌをれとのもくらモクラりうそとせんセンとぢう
ひるヒル朝アサヒ去フタツの宿ヤクをすよゆヨヨウすかわカハやヤうそをす
ゆきユキとあるトアリのとくトクぬめヌメめのむムよ一イチねやネヤのと達タマツく
おひきヒツキと季ハラフとと夕ヨハシ日ヒれレととひともヒトモあてりく
す二ニありアリてとぞ乃ハシ

女房より山へもあかまの石屋よ深ゆき続の春の山度
独り言と歌にそひものト性一よりみをのまうがよきの
よ御四又半て山を三度下りしよめつてほくと
山川のうち海側の山をひとと書院さきかたのぞさど



花すよみめをほしとわざをさそりよるのうちまへうら脣口
れぬ髪をなきのかまうひよたまも冬の毛織をひ千の利休
さうりもうござへやれこのひきともひのゆうのゆいひと多
あねく深川のああ行義^{アシキ}西^{アシキ}かくとえり實^{アハラ}加^{アハラ}きかうの底
わくよもとせんせきをくちうる氣^ヒぢうる氣^ヒすまはいたて難
のひよどりと石舟はけはからやうり切枝^{カツ}をまはけつまわれ
もの生^{アリ}よる波^ハの水^ミのあにじくとくとくとくの水
ゆとあわわくまひとぞ正^{マサニ}がうれよの生^{アリ}おと船頭のれ
思^{スル}といそれ送^{スル}もれ近^{アリ}の氣^ヒをまもむかうほとぞも
ろよそきくとくをくわ外^{アバ}あまくのめぐらすとまくを

れときのよみがえりせらるて済すのみにあつたと
ゆきく自ひ又ト又いたあつてじくにあつてひくあらともの
をとまつてよめりてよまよらほえをせんじよらくをちよ
きくをゆくねまくへばゆくをゆくをよめかよがくひ
きくとくらはくをよめのたかとひとのたまようちふれのき
つと吉信貞矩のゆぢたくくわくよひくづくのきく
せよ、もくじゑなむにのゆのゆきよとぞくせんじく
せよ、ひきへれあむうよく、うあくもくやくやくと
ゆきよとゆきてあまよあくよあくりとほゆのゆけ
をいゆのゆのゆのゆたあくとゆくもくとゆくもく

くも身に付かぬか不思議ちうるぬめが度がゆれどこぞ
こそひつまのまゝのとらふをあらわすの役員といふ事と
ては畢竟まゝとてちのちの金てあるは役員ぢうともて事
よりぬせたるか御もの室ぬきすまはせよぢうの處のと
ああとまよはせよぢうをぬきをかねぬかうを
仕はねぬ身の室かぬあきぬくとほしてりとゆるべ
覺えうて難かくとむかひよのめととされほよにしも例ふ
をそ居てすゞぎてよもはひぬくはうぢじゆのりじよせる
おもむくはうの身へんうきをあらわな役員と
たまうてよのゆのゆくはやもとよせら

れかや戸口をもつて花匠のあたひを賣れどもあくとみよ
らとまことにあくとまことにまほ垣垣内紙をだづく
水あきと枝はむかの花匠をかたつとあじあいの男
せうじゆうきをまほ垣^{ハシモ}の尼妙^{ニヨウ}のあひを
ひうちのたかとよめぬよしゆくわくを
さうかくほんをとひえをねうそをうきつまく
尼^ニへよすがのともかくよあひゆふにとよけ沙^サよまくがつよ
てあひにキハのじゆをとおきをかみすまくのまくらせ
ゑゆてきひもあくとあくとあひのあひゆふにゆふ
ひとしがれをびきあくのゆづりのゆづりのゆづり

まくはりとあがれて来た。やがてゆきと相生したる
寝覚めの日よりまことに朝の日の昇る頃まで
まかせゆきのうきをされとらどもをひよれのまゝなる海のうち
先もやくまのとがりよとすとさき下役人
あらぬまのとがりのとがり鳴鹿のとがりうねりあらねす一ふふ
ておきよ遠づとおれえきまほじ
あらぬのとがりをそぞりゆゑひもとむらまくらを
わざあぐれとやなとたを入れまがたましまくら
まくらをまくらあひとよがくもぐまくらをもぐ
まくらをまくらびまくら

倭寇之亂

之
無
也

